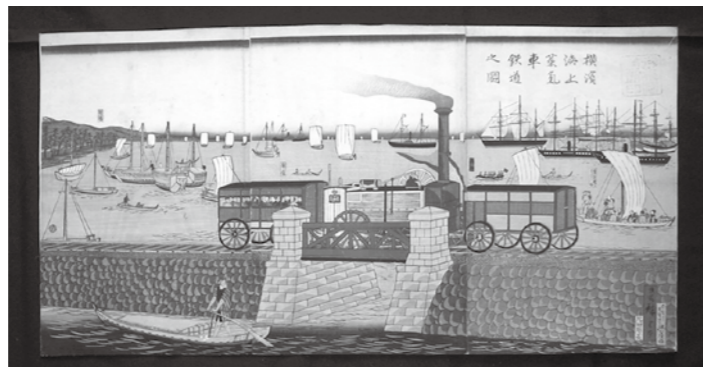


◀再改 横浜風景（彦根市立図書館蔵）  
日米修好通商条約に基づいて開港された  
横浜の町の様子が描かれている。

翌年に横浜と長崎が開港されました。横浜は、当時、一漁村でしたが、ペリーの二度目の来航時の応接所が設けられたことをきっかけに、港に適した地形的条件もあって、井伊政権の下で、開港場が横浜に置かれることが決定しました。その後、都市計画に当たって外国人居留区や、貿易施設が建てられ、のちに国際貿易都市として発展する横浜の基礎が築かれました。

開国後の日本は、西洋の技術が流入し、新しい制度や思想とともに、西洋風の生活様式も取り入れられました。横浜では、れんがづくりの洋館が建設され、馬車や人力車が走り、洋服を着る人も出てきました。明治5年（1872）には、東京と横浜間に鉄道も開通しました。また、直弼は、かねてから、西洋の技術を吸収し、富国強兵をはかることを考えていました。この計画は、直弼の死後、勝海舟を艦長とする咸臨丸の渡米によって、実現しました。この遣米使節から、福沢諭吉など、日本の近代化を推進した人材が出ました。



▲横浜海上蒸気車鉄道之図（彦根市立図書館蔵）

開国がもたらしたものの開国後のようす

日米修好通商条約が調印された翌年に横浜と長崎が開港されました。横浜は、当時、一漁村でしたが、ペリーの二度目の来航時の応接所が設けられたことをきっかけに、港に適した地形的条件もあって、井伊政権の下で、開港場が横浜に置かれることが決定しました。その後、都市計画に当たって外国人居留区や、貿易施設が建てられ、のちに国際貿易都市として発展する横浜の基礎が築かれました。

開国後の日本は、西洋の技術が流入し、新しい制度や思想とともに、西洋風の生活様式も取り入れられました。横浜では、れんがづくりの洋館が建設され、馬車や人力車が走り、洋服を着る人も出てきました。明治5年（1872）には、東京と横浜間に鉄道も開通しました。また、直弼は、かねてから、西洋の技術を吸収し、富国強兵をはかることを考えていました。この計画は、直弼の死後、勝海舟を艦長とする咸臨丸の渡米によって、実現しました。この遣米使節から、福沢諭吉など、日本の近代化を推進した人材が出ました。

井伊直弼と開国150年祭が始まります

6月から平成22年3月にわたって、「井伊直弼と開国150年祭」が4日の開幕記念式典から始まります。具体的な事業は、広報ひこね5月1日号14、15ページをご覧ください。

彦根城博物館でも直弼を特集します

テーマ展 **直弼発見! 巻の1**  
「井伊直弼 大老への道のり」  
直弼を特集するテーマ展シリーズ「直弼発見!」巻の1～12を順次開催します。6月24日(火)まで巻の1「井伊直弼 大老への道のり」を開催しています。

常設展 **直弼のころ**  
「井伊直弼と開国150年祭」期間中、さまざまな直弼ゆかりの作品を展示し、その人となりを紹介します。

直弼と茶の湯

政治の舞台で活躍した印象が強い直弼ですが、3ページで少しふれたように、禅や茶の湯に熱心に取り組みました。幼少より学び始め、埋木舎で過ごした時期に、禅や居合などの諸芸とともに、茶の湯について、研究をしました。そして、当時、武家の間で行われていた華やかな遊興を伴う茶の湯から離れて、精神性を深める、わびの茶の湯に立ち帰ることを目指し、一派をたてることを宣言します。

藩主に就任した後も、多忙のなかでも、茶の湯の研鑽は変わらず続け、自身の茶の湯の集大成となる著作「茶湯一会集」も残しています。この著作のなかで、一度の茶会での出会いは、一生に一度だけのものであるから、心を尽くして出会う大切にするという意味の「一期一会」という言葉を残しています。

大老就任、そして日米修好通商条約締結

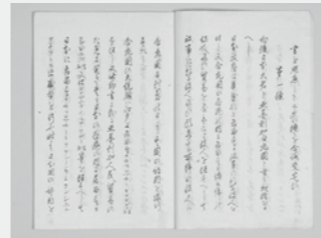
直弼が藩主になって、3年後、4艘の黒い船が浦賀（神奈川県）の沖合いに姿を現しました。ペリーが率いるアメリカ合衆国の軍艦でした。ペリーが来たのは、アメリカの船が太平洋を渡って、中国に向かうときに泊まる港を開くことや、日本と貿易をするためでした。ペリーは、一度、帰国しますが、翌年、再度来航し、幕府と話し合つて、下田（静岡県）と箱館（現在の北海道 函館）の港で、アメリカの船が航海に必要な水や食糧などを手に入れることができる、日米和親条約を締結しました。

この時代の日本の人々は、これまでに見たことがない、アメリカ艦隊の蒸気船の大きな姿に、強い力や進んだ技術を感じ、ショックを受けた。当時、日本は、強い外国と交流して進んだ技術を取り入れようという開国派と、これまでどおり、外国船が来たら追い返そうという攘夷派とが二分する時代にありました。ペリーが来航したとき、直弼は、いったん開国して西洋の技術を吸収し、国力を増強したうえで、外国と対抗し、再度、鎖国に立ち戻ることもありうるという考え方を持っていました。

日米修好通商条約

安政5年6月19日（1858年7月29日）に、江戸幕府がアメリカ合衆国と結び、貿易の自由を認めた最初の条約。

条約の主要な点は、アメリカ公使の江戸駐在、すでに開港済みの下田・箱館（現在の函館）に加え、神奈川・長崎・新潟・兵庫の開港、外国人居留地の設定および同地における自由貿易、江戸・大坂（現在の大阪）の開市などを定めた。



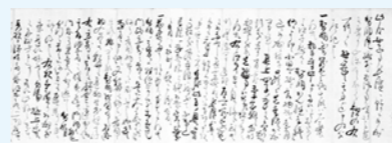
▲日米修好通商条約写  
（重要文化財 彦根藩井伊家文書  
彦根城博物館蔵）

手紙から読み取る直弼の性格

彦根城博物館学芸員 渡辺恒一

直弼が書いた手紙を読むと、言いまわしや理屈の立て方から、彼の性格や思考の特徴がうかがえます。強く感じるのには、思い悩み、考え込む人だということ。悩みを相談した手紙では、自分が何をどんな風に悩み、どう対処しようかといったことを書き連ねています。心の揺れが、そのまま文面にあらわれる手紙は興味深いものです。

直弼はこれまで、「決断」、「果断」の人と賞賛されたり、あるいは「独断」と非難されたりしていますが、それらとは印象が異なります。特に政治の世界では、心の揺れなど見取られては命取りです。直弼の決断の内には、悩みや心の揺れなどが、たくさん秘められていたのだと思います。彼は、完全無欠のヒーローではないですが、わたしは、思い悩むその姿に、むしろ人間的な魅力を感じます。



▲犬塚外記宛て井伊直弼書状（重要文化財  
彦根藩井伊家文書 彦根城博物館蔵）

と直接、政治交渉をしてはいけないう決まりでした。そこで、直弼は、幕府に反対する人々たちを処罰します。これが安政の大獄です。その後、安政の大獄に対する反発から、直弼は、江戸城桜田門外で水戸藩浪士らによって、暗殺されました。条約調印が、政治の抗争を引き起こす結果となりましたが、この条約の締結が、日本の近代化のきっかけになりました。